

も皆なそれで、此等の諸君あるが爲めに、撰科の歴史は何時迄も燦たる光輝を放つて居るのである。此點から云へば、肝腎の本科は寧ろ顔色なして、今日専門美術家として社會に重きをなして居る人は、實際寥寥たるものだ。

これと云ふのも、從來の本科生に對する教育なるものが、専門の美術家を作ると同時に、また一面中等學校の圖畫教員たるの資格を具備させるべく企圖して居たから、自然斯くの如き結果を呈したもと思はれる。

併し乍ら、昨年（一九〇八年）の六月、文部省令第十八號に於て新に圖畫師範科加設の事が發表されたので、中等學校の教員は一にこの科の獨占となつた。されば今後の本科生は、從來の撰科の特色を其儘讓受けて、多くの専門美術家を出すことだらう。同時に、學校の方でも、從來の方針を多少改める處あり、日本畫洋畫兩科に於ける撰科生の新募集は、今後或は行はれずに終るかも知れない。現に今年の洋畫科一年には、撰科生を保有して居らぬ。今後、若し撰科生の募集があつたら、其數は洵に僅少なるものであるだらう。入學期は多くの場合〔毎年少〕年の九月で、試験は、夏季休暇前に行はれるのを例として居る。そして、募集の廣告は、矢張官報紙上で發表されるのだ。

最後に、吾人は曾て黒田教授が洋畫科志望の學生に對して語られた談話の一節を摘出して、結末の言に更へやうと思ふ。それには、——眞正の美術は眞似や氣取りで出来るものでない。それには、矢張正當の順序を踏んで稽古をなし、正當に費すべき時間を費やし、苦みもし、而も天賦の才ある人にして、初めて成功するのである。

ある。されば、今後本當に繪畫で身を立てやうと云ふ人は、一時流行の繪端書や、雜誌の口繪位に満足せず、急かす振らず、眞面目な稽古を爲なければならぬ即ち、繪を以て樂みとはせず、却て苦しみとする程の覺悟が是非欲しいのであると。その所謂眞面目——これぞ眞に藝術家のモットーで、また生命である。味ふべき文字ではあるまいか。

〔『中学世界・學事顧問』『中学世界』第十一卷第八号。博文館臨時増刊二十一。明治四十一年六月〕

### ⑤ フェノロサ死去

一九〇八年（明治四十一年）九月二十一日、アーネスト・F・フェノロサはヨーロッパ旅行中ロンドンで心臓発作により急逝した。五十五歳であつた。遺骸は一旦ロンドンのハイゲート墓地に葬られ、翌四十二年に三井寺法明院に改葬される。

フェノロサ死去の報道は明治四十一年九月二十七日の『東京朝日新聞』の外電によつて齎され、引き続き新聞や雜誌に關係記事が掲載されたが、特にフェノロサと關係の深い本校では『東京美術學校校友会月報』第七卷第二号に屋代鈇三による左記の追悼文を載せた。

謹みて弔意を表す

嗚呼フェノロサ博士

（晁江稿）

我校創立當時の恩師として、又我美術の推獎者鼓吹者として、貢獻せし所少からざりしフェノロサ氏は、先頃英京倫敦〔ロンドン〕に於て易簧

せられたるの報道に接す。吾人昔日の効績を思ひ、殊に痛惜の情に堪へざるなり。是を聞く、氏は我校の前身なりし圖書取調掛の設けられし頃より、其一員となりて盡力鮮からざりしが、明治二十一年十月四日同掛を廢し、勅令を以て更に我東京美術學校を設けられ、越て明治二十二年二月、東臺の一角なる教育博物館の一部、即今の新館のみを以て教場に充て始めて授業を開始したるの時に方り、氏は本職を帝國大學に奉じたりしが、「フェノロサは明治十九年八月同大學辭任。——編者註」我美術の嗜好甚だ深く、且その鑑識に長ざる所より、我校にもまた教鞭を執り、審美學の講座を擔當して、其理論と應用とを教へ、色彩の原理配合等をも説き、實技にもたづさわりて、構圖の法を授け、諄々として教導に努められたり、而して氏は邦語を能くせざりしを以て、多くは時の幹事にして前きの我校長たりし岡倉覺三氏の通譯に因りて授業せられたり。明治二十三年の夏に至り、雇聘の期満ちて將に米國に歸らんとするや、本校職員は其別れを惜み、氏を梅川樓に招待して大に宴を張り、其行を壯にせりと。氏が本校との關係の要は前述の如くなれども、社會に於ける氏の功勞もまた大なるものあり。當時社會の状態は、西洋文物を崇拜するの夢未だ覺めず、我美術の如きは殆んど顧るものなく、鉅匠の筆は僅少の金にて賣買せられ、寺院の佛像は塵埃と同視せらる。氏大に之を慨し、足跡の印する所我美術の研究に耽りて寢食を忘れ、其精妙を推獎して以て世人の眠りを警醒し、又畫家に遭へば縷々として畫論を上下して、西洋畫の手法と畫論の應用を説けり。故に今の男爵九鬼隆一、岡倉覺三兩氏と共に、奈良京都其他の地方の古社寺

に於ける美術上の調査研究のために出張したること一再に止まらず、到るところ其所信を披瀝して熱心に我美術の特種の所長を賞揚し、保存復興を圖るの途を唱道せざるなし、邦人の迷夢之に由りて打破せられたる、我美術の聲價之に依りて揚りたる、其功績寔に尠からざるものあり。吾人が氏を稱して、我校及我美術界の恩師功績者となす、溢美過譽の辭にあらざるなり。思ふに明治の美術史を編むもの必ずやまた氏の功績を没せざるべし。氏が經歷は、左に記する所に依りて其一班を窺ふに足るべきものあるを以て、茲に筆を擱き、謹みて弔意を表す。

同誌には引続き明治四十一年九月二十九日『東京朝日新聞』所載高嶺秀夫談話、同日『国民新聞』における狩野友信、大村西崖の談話をまとめた「忘れられぬ人」、同年同月二十八日同紙所載筆者不明記事「明治美術界の恩人フェノロサ博士逝く」が引用されている。引用の際に文章と史実の誤りが修正されているが、フェノロサ来日の年や本校へ就職した年の誤りなど、大きな誤りがお看過されており、やはりフェノロサは本校に於いても過去の人になっていった感は免れない。

同年十月四日、金子堅太郎、浜尾新、高嶺秀夫、河瀬秀治、井上哲次郎、岡倉覺三、和田垣謙三、嘉納治五郎、三宅雄二郎、有賀長雄、小林文七らは帝國大學でフェノロサ追悼会の協議を行った。そして、死去の確認、代表浜尾新のボストン美術館モリス博士宛電發送、仏式追悼会の計画がなされ、井上、岡倉、有賀の三名が追悼会幹事となり、フェノロサが浮世絵研究を通じて親しくしていた小

林文七が事務を取扱うこととなった(明治四十一年十月十九日『東京朝日新聞』)。

追悼会は同年十一月二十九日に上野の寛永寺で行われた。『東京美術学校校友会月報』第七卷第四号(同年十二月)はこれに関して次のように報じている。

○故フエノロサ氏法會 日本美術界の恩人として其名を知られたる、米國人フエノロサ氏が倫敦に於て客死せられしに付、本邦に於ける知己相謀り、法會を營むの計畫ある由は嘗て報ぜしが、金子堅太郎、濱尾新、高嶺秀夫、河瀬秀治其他諸氏の發起にて、十一月五日午後一時より、帝國大學内御殿に於て有志の協議會を開き、左の諸件を議決せり。

一 來る廿九日上野寛永寺に於て、午後一時より法會を營み、終て精養軒に於て會食し舊事を談ずること。

當日は米國大使を案内すること、  
一 フ氏の議論文章等美術に關せるものを編輯して出版すること。

一 フ氏の半身像を美術學校内に建設すること。

一 フ氏未亡人に對して追悼文を贈ること。

因にフ氏の法會を寛永寺に於て營むこととなりしは、氏が生前天台宗に歸依して信徒となり居りたるが爲めなりと。

○フ氏の追悼會 別項記載のフエノロサ氏の追悼會は、十一月廿九日午後一時より、上野寛永寺に於いて催はされたが、來會者は何れも故人フ氏の生前に因縁深き人々にて、有賀博士夫妻主と

して斡旋せらる。此の日法會の導師は權大僧正救護榮海上人なり。フ氏が生前天台宗の名僧櫻井慶德師〔敬〕に就て、諦信居士の法號を受けたるゆかりある事とて、參詣者の感慨を深くせしめたりき。式は濱尾總長、土方〔久元〕伯の弔詞、參詣者の燒香に終りたるが、生前知己の米國婦人三名喪服をつけ、燒香して打沈みたる様は又なく憐を添へたり。精養軒にての追悼會は、午後四時に開き、此には朝野名士數十名の來會あり。井上博士の挨拶ありてフ氏と最も早く知りし金子〔堅太郎〕子爵の追懷談あり。其中にいふ〔「フエノロサ氏は本來イスパニア人〔イスパニア系の人〕で、明治十二年の秋日本へ來られました。當時、頻りに書畫骨董を捻くつて居られたが、能く見ると皆贗物であつた、私が其旨を話すと、氏は如何したら日本畫の傑作が見られるかと言はれたので、黒田侯爵家に御願して、狩野元信を始め、探幽、應學などの幅を見ましたのが、抑も氏が日本畫研究の初めです」とて、それより一二年の後に、早くも日本畫の通になつたことを話され、〔「フ氏が雇を解れて國に歸る時、私に一尺ばかりの容積ある原稿を示されましたが、之は日本美術史の原稿で、大した物でありました、出版されては如何かと勧めると、否まだ／＼満足が出来ぬ、日本畫の本源は支那からわたつて來て居る 支那の繪も充分研究しないとあやふやで面白くないと持重せられたが、終に公にならなかつたのは惜い事です」と述べ、〔「フ氏は大變な日本最負で日露戰爭中も、米國の各地方に招かれて日本の風俗人情を話された、就中最も妙なのは前大統領ルーズヴェルト氏が、日本を知り初めたのは、フ氏を白館ハコイノウスに呼んで、日本の講演を聞いたのが抑もの初め

で、此時日本人の希望の雄大なることと、氣韻の高尙なることを知り、爾來日本に關するさまざまの書籍を涉獵つて、眞の日本を知やうになられました。之は私がルーズヴェルト氏から直接承つたものです、フ氏が倫敦客舎で急に死んだのは、氏が日本美術史を完うする爲、支那の繪畫のみならず歐洲の美術をも研究する必要があるより、倫敦に赴きたる折も折、不幸にも頓死したるなり。氏が在米の時はボストン美術館の東洋部長となり、〔キョーレターの誤り〕又た其の所有の繪畫は五十六萬圓にて買ひ上げられ、寧ろ有福に暮らしたる位なりし〔河〕との金子子爵の話に次いで、川瀬秀治氏の追懷談ありて食堂を開き、有賀博士夫妻を中心に、米大使館員一名其の他は井上哲次郎、岡倉覺三、朝比奈知泉、和田垣鎌三、高嶺秀夫、其の他五十餘名の名士來會者が紀念帖に署名したる冊子と、追悼記事を英文にもしたるとを合せて、フ氏の未亡人マリフエノロサに送る筈なりと。

岡倉覺三がフェノロサの前夫人リジーに書き送った追悼文と參會者リスト（山口静一著『フェノロサ 下』昭和五十七年。三省堂）によると、追悼会の当日はほかに今泉雄作、岡不崩、岡崎雪声、狩野友信、川端玉章、桜岡三四郎、島田佳矣、下村觀山、白井雨山、白浜徹、高村光雲、竹内久一、本多天城、正木直彦、溝口宗文、六角紫水等、本校関係者が多数參會したことがわかる。

翌四十二年九月、フェノロサの遺骨は三井寺法明院に移葬された。その間の事情については左の文書（本学芸術資料館所蔵正木直彦宛書簡No. II-3。有賀長雄が作成し、明治四十二年七月十一日に正木を含

む十二、三名に配布した印刷物）に明確に記されている。

拜啓御繁忙之際恐入候へ共左の要領書御一覽の上來る廿日相談會へ御出席被下候へは幸甚奉存候也

一、昨年十一月廿九日寛永寺に於てフェノロサ先生追悼會相開候事に付遺族へ詳細報告し寫眞送置候處在モビル未亡人（メアリー）よりは有賀長雄宛に又ボストン家族（前夫人リジー、娘ブレンド等）よりは金子（堅太郎）子爵宛に懇篤なる禮狀參居り各位へも傳達方依頼有之候事

二、フェノロサ未亡人は本年二月十二日を以て在紐育山中商店員林愛作氏に書簡を寄せ、フェノロサ先生遺體を倫敦にて火葬の上遺髪を日本に送り先生生前の希望に因り三井寺に埋葬致度も經費等不如意に付可然周旋煩度儀申出でられ、林愛作氏より水野領事を経て右の趣益田孝氏へ傳達有之候に付益田孝氏は追悼會舉行の事に因み右一件を有賀長雄へ移されたり

三、其後本年五月中林愛作氏歸朝にて有賀長雄に面會を求められたるに付日本赤十字社に於て面會の處左の事情判明せり

(イ)倫敦に於てフェノロサ先生を假埋に致しある墓地は貧民を埋葬する處にして實に悲惨なる状態故是非とも何とか致度事

(ロ)フェノロサ先生息女ブレンドは先年結婚の處其の夫は失敗の結果目下行衛不明の不幸中に在り、其の爲、在ボストン家族も多少の財産を喪ひたる形跡ある事

(ハ)在モビル未亡人と在ボストン家族との關係は稍融和し先生遺髪をモビルに葬ることも、ボストンに葬ることも不便とする

事情あるに付、雙方とも日本に埋葬を望むに於て一致せる事

四、其の後未亡人より四月八日付を以て有賀長雄宛に來信にて同

一事件を先生生前の知己諸君へ懇願の儀依頼あり

五、因て有賀長雄は倫敦に於ける火葬の手續を山中支店の諸君に依頼して其の經費は本邦有志家より支出することとし、其の費額取調方依頼しおき、一方三井寺のは自分にて調査することとし、本年六月五日三井寺に至り管長直林敬圓阿奢利に面會の處左の要點確定せり

(イ)フェノロサ先生の生前往來せられたるは三井寺より少しく隔りたる山中に在る法明寺（院）にて先生に授戒せられたる櫻井敬徳阿奢利は同寺八代の住職に有之現代は即ち直林敬圓阿奢利にてフェノロサ先生、ビゲロー氏等と別懇に被致先生未亡人は同師に付受戒せられたる事

(ロ)右法明寺の庭園は八景を眼下に觀て天下の勝景と可申其の一隅に墓地あり、先生か永眠の地とせんことを望まれたるは即ち此の處なる事

(ハ)右は三井寺の僧のみを葬る場所なれど、既に寺外の僧として町田久成師を葬り又出家に非ざる人としては森弘平氏を葬りたる先例あるに付フェノロサ先生の爲にも一隅を愛割すべし然れども地處を賣る等のことは出來ず維持費さへあれば永久に寺にて世話すべしとの事

(ニ)寺に附屬の石屋に墓の見積り爲致たる處最も節約すれば百圓にて出來すへきに付諸經費とも二百圓以下にて濟し、別に金百圓銀行預けにして其利子を永久維持費に充つれば事足るへ

き事

六、山中商店用務の爲渡清中なりし林愛作氏は歸京の上去年六月廿八日有賀長雄を訪問あり、倫敦の方は二十五磅乃至三十磅にて事足るに付山中支店に於て立替へ、火葬の上本年八月中旬までに歸朝の同店員富田熊作氏遺髪持歸りの筈に運居候由申出相成り、尙又同日益田孝氏よりも倫敦に於ける火葬手續萬端に關する書類寫し送達相成りたり

右の次第にて可相成は來る九月廿一日先生一周忌までに墓碑完成致度、其の經費に追悼會殘金三百圓轉用の件、並に不足填補の方法等御協議煩度候間來廿日午後正二時本郷帝國大學内山上舊御殿へ御來車の程偏に奉願上候 頓首

(イロハ順)

井上 哲次郎

七月十一日 岡倉 覺三

正木 直彦

有賀 長雄

法明院への埋葬のため、帝国大学は四百円を、本校は二百円を寄附した。これについて有賀長雄は、

「其後濱尾總長、正木校長の御盡力に依つて名義は、美術學校の分は

故フェノロサ教授ノ本邦美術復興ニ關スル事蹟調査並ニ論說蒐集方及御委囑候處今般右ニ關スル報告書御提出ニ付手當トシテ

金貳百圓贈呈候也

とありまして二百円、大学の方からは四百円を贈与せらるゝことになりました。」

〔東京美術学校校友会月報〕第十九卷第六号。フェノロサ氏記念号。大正九年十月)

と述べている。この「報告書」は現在東京芸術大学附属図書館に収蔵されている「フェノロサ教授遺稿并ニ事蹟調査書」四冊をさすと考えられる。これが東京美術学校文庫の台帳に登録されたのは明治四十五年で、納入者は不明。価格十円と算定されている。その中身は次のとおりである。

一、「フェノロサ教授美術に関する演説筆記」

○「日本〔副題〕の将来〔大日本〕」(日本美術新報第十九号及第二十一号所載 有賀長雄君筆記)

○第二回鑑画会演説〔大日本〕(日本美術新報第三十号三十一号三十三号所載 会員某筆記)

○「日本美術工芸は果して欧米の需用に適するや否や」〔大日本〕(日本美術新報第四十三号及四十四、四十五号所載津田道太郎記)

○「鑑画会に於てフェノロサ氏の演説」〔大日本〕(日本美術新報第四十九号所載)

〔以上は『大日本美術新報』所載フェノロサ演説和訳を原稿用紙に毛筆で書き写したものである。〕

○「フェノロサ氏演説大意」

〔日本美術協会報告〕第百九号所載「演説大意」を原稿用紙に毛筆で書き写したものである。その際送り仮名の片仮名は平仮名に直され、文章の脱落が生じた。〕

二、「美術真説」

〔明治十五年龍池会発行『美術真説』を無野紙に毛筆で書き写したものである。〕

三、「The Eastern Question」

〔一九〇四年ミネアポリスに於ける講演の筆記をタイプ印刷したものである。末尾に Delivered at the Church of the Redeemer, Minneapolis, Sunday evening, February 7, 1904. Reported by W. M. Higgins. 1898.〕

四、「玄智院明徹諦信居士 米國人フェノロサ先生 略伝(未定稿)」

〔明治四十二年十月有賀長雄著。印刷物〕

その後、同四十三年に未亡人によりロンドンのハイゲート墓地にフェノロサの記念碑が建てられ、同四十五年に同じく未亡人により遺稿が Epochs of Chinese and Japanese Art, 2 vols. としてロンドンとニューヨークで出版され、翌年仏文抄訳と独文完訳が出版された。独文版はミルケ (F. Milke) と原震吉の共訳であった。(原はドイツ留学(医学)中ハンブルグ美術工芸館員となり、のちに同館東洋部主任となった人で、金工史の研究者である。原安民の親友で、本学芸術資料館所蔵原安民資料中に震吉のドイツよりの書簡が多数含まれている。) 大正九年に至りフェノロサ記念碑が東京美術学校内に建てられ、十三回忌法要が営まれ、翌十年、Epochs of Chinese and Japanese

Artの有賀長雄による訳稿が『東亜美術史綱』としてフェノロサ氏記念会から発行された。

## ⑥ 日本画科の改革

明治四十一年八月二十九日、日本画科では教授の荒木寛敏と下村観山が辞職し、小堀鞆音が教授に、松岡映丘が助教になり、次いで九月十六日付で福井江亭が教授となった。鞆音はかつて日本青年絵画協会や日本絵画協会などで活躍し、本校助教教授となり、明治三十一年辞職して日本美術院に加わったが暫くして院を離れ、この当時は日本美術協会で活躍していた。歴史画を本領とし、有職故実に精通していることで知られていた。江亭は川端玉章門下。日本青年絵画協会、日本絵画協会、日本画会、无声会などに加わって作家活動を続け、三十六年以降愛知県立工業学校教諭の職にあった。玉章の信任厚く、病氣勝ちの玉章を助けるという条件で起用された。映丘は本校日本画科の卒業生。鞆音に師事し、大和絵復興をめざして研鑽を続けていた。なお、それまで日本画科の助教教授であった鶴田機水はこれより図画師範科の日本画担任となった。

教授陣が揃ったところで正木校長は同科の教育方法を改正した。その概要は「東京美術学校近事」(48頁)に記されているが、附記すれば、この改革で一応流派別教室制度とも言うべきものができ、生徒は一年生から研究生に至るまで、次のいずれかの教室に所属して一貫性のある指導を受けることになった。

第一教室(玉章、江亭)四条派を主体とする。

第二教室(広業、素明)狩野派を主体とする。

第三教室(鞆音、映丘)土佐派を主体とする。

そして、直ちに教室分けが行われたが、その結果、第一教室十七名、第二教室五十二名、第三教室三十七名となった。第二教室に人氣が集まったのは担任教師の画壇での活躍振りが反映したのである。のちに文展で映丘の華々しい活躍が始まると、生徒は素明派と映丘派に分かれて勉強に競争心を燃やすことになる。

退職した教授のうち、寛敏はすでに以前から日本画科では顧問格に退いていたが、観山の場合は辞任の背景がやや複雑であった。彼の所属する日本美術院は、急先鋒の横山大観や菱田春草らのいわゆる朦朧体の画風が悪評を蒙ったことや、他の有力会員が次第に院を離れたことなどにより、明治三十六年頃から急速に衰微し、数々の名作を生んだ日本美術院・日本絵画協会聯合絵画共進会も同年十月の第十五回を最後に廃止となった。院の統卒者である岡倉寛三はボストン美術館顧問となって(三十七年)アメリカに滞在することが多くなり、その間に院は負債を重ねて経営難に陥った。三十七年には機関誌『日本美術』に編集者の塩田力蔵が院の内幕を暴露した「嗚呼日本醜術院」を掲げ、次いで三十八年八月、同誌第七十九号発行後、その発行権も塩田個人に譲渡された(その後原安民の日本美術社が継続発行)。院は全く空虚に等しいものとなり、ただ月例研究会で ある二十日会のみが細々と活動を続ける(三十九年五月まで。)といった有様であった。そこで岡倉は体制立て直しのため三十九年に院の規程を改め、院を第一部(当分東京に置く。幹理横山大観)と第二部(奈良東大寺勸学院内。主幹新納忠之介)とし、自らはあらためて院の主幹となったが、その後、自分の別荘のある茨城県の五浦に院を移転